

女の予言どおり、故郷に帰還するまでに葡萄色の海の上でまだ数多の苦難が待つてはいるので

すが。

(十文字学園女子大学)

人間教育のエッセンス

『シーラという子』

伊藤美奈子

敵意むき出しの目をしたちっばけな子ども、シーラ。家庭内暴力、貧困、精神的にも肉体的にも虐待を受け、愛を知らずに生きてきた六歳の少女が、初めて自分を受け入れ愛してくれる教師に出会い、堅く閉ざされた心をおさるおさる開いて

いく。その五ヶ月間の様子を、直接関わった教師自身が書き綴った話である(トリイ・L・ヘンデ著、入江真佐子訳、早川書房、一九九六年)。ある日突然、著者トリイの教室にシーラがやってくる。傷害事件を起こしたため精神病院にはい

ることになっていたが空気がなく、臨時の措置であった。しかし、トリイの教室は、あらゆる障害児教室から見放された子どもたちをすでに八人も抱えていた。みんな手厚い保護を必要とするデリケートな子どもたちである。それなのにスタッフはわずか三人。季節労働者のアントン、彼は子ども相手の仕事をした経験はない。それに中学生のウイットニー。それぞれに心に翳りを持った仲間たちであった。しかし、こんなちぐはぐなチームが、この教室の子どもたちの心の波長にぴったりと寄り添う形で互いに成長を遂げていく。

なれなれしくしすぎて彼女を怖がらせたくなかったが、私が彼女のことを気にかけていることはわかってほしかった。P 52

トリイの教室は、あくまで学校の中にある一つのクラスである。だからトリイは、シーラに対しても特別扱いほしくない。純粹であるがゆえに手厳しい子どもたちの言葉から、シーラをかばうこともない。たとえその場ではかばえても、別の場では痛い仕打ちを受けることはわかっていたからである。とことんクラスの一員として、クラスの子どもたちの中でシーラを受け入れようとしている。しかし、シーラにとって見知らぬ人に近づかれたり接触されるのはいしれぬ恐怖を呼び起こす。それを敏感に察知し、適度な距離を保ちながら気持ちだけはシーラに向け、つねにサインを発信し続けるトリイ。人間への信頼感を根こそぎ奪われた子どもに近づくときの基本姿勢ともいえる心構えが滲み出ている。

椅子をコーナーから運んで部屋のまん中に置いた。彼女をクラスのみんなから孤立させたくなかったからだ。P 30

椅子をコーナーから運んで部屋のまん中に置いた。彼女をクラスのみんなから孤立させたくなかったからだ。P 30

…私が聞いていることを知らせるために、

ふんふんと相槌はたくさん打っていたが。それから、お互いの顔を見ないで話ができ、またいま話しているんだということをあまり意識させないために、ぬり絵をしたり、紙粘土で何か作るなどの、集中しなくてもできる作業で忙しいように工夫をした。P 100

トリイの教室に入ってくる子どもたちは、みんなそれぞれ事情を持っている。自閉症、強迫神経症、知的障害、そしてその事情ゆえに二次的な心の傷も受けている。そんな子どもたちがおもむろに自分を語り出すときがある。その際、面と向き合う姿勢は子どもにとって非常に重いものとなる。大人からのまなざしが子どもの言葉の流れを止めてしまうこともある。そんなとき、心と耳は傾けながらも、しばりとなる視線をぶつけないような工夫が必要になる。これは、障害を持つ子どもだけでなく、思春期の子どもたちに接する場合

にもあてはまる。

生まれてから六年間、彼女はずっと疎んじられ、無視され、拒否されてきた。車から放り出され、人々の生活からも放り出されてきた。そしていまになってようやく彼女を抱き、話しかけ、しっかりと抱きしめてやる人間が現れたのだ。シーラは私が示す愛情をひとつ残らず吸収した。P 106

トリイや教室の子どもたちとの交流で、敵意だけしか読みとれなかったシーラの瞳から、その影が消え、だんだんに子どもらしい表情が戻ってくる。真実の愛情と善意に出会い、不幸な過去という覆いが徐々に外されていくにつれ、本来のシーラらしい素直さと才能が開花する。このときのトリイの感激は、教師としての驚きとして書かれているが、それ以上に行間から滲み出るシーラへの人間愛に心打たれるものがある。

私が彼女から離れてしまわないということを知って、安心することが彼女には必要なのだと感じていたからだ。依存と依存過剰との間のどこで線を引くかは微妙な問題だった。

P 137

(親子ごっこをしようというシーラの提案に
対し) 私が今まで受けた心理学の授業のすべてが、だめだといえと迫っていた。だが彼女の目を見ているとどうしてもそうはいえなかった。 P 243

トリイはシーラに、教師として出会った。シーラに限りない愛しさを感じながらも、トリイには教師としての顔がある。どこまでも甘えさせるべきなのか、甘えすぎになっていないか。トリイの心は、いつもこの迷いの間で振り子のように揺れ動いている。〃近づきすぎてはいけない。枠を壊してはいけない。でも今この子には、過剰なばかりの愛情が必要なのだ”。これは、学校現場でも

カウンセリングの場でもしばしば経験するジレンマである。この〃切迫した揺れ〃なしに真の心の接触はあり得ない。

心に傷を負った子どもたちが増えている。ある子どもは、他者を傷つけたりモノを壊したりというように、外在化・行動化することでその苦しみを紛らわそうとする。またあるものは、その苦しみを内向させ、自分の殻に深く閉じ込めてしまう。

犠牲者はシーラだけではないのだ。彼女の父親もまた彼女と同じだけの気遣いが必要としており、またそうされるだけの資格を持っているのだ。ああ、そういう人に気配りをしてあげるだけの十分な人間がいたら、無条件に愛してあげるだけの人がいたら―私は悲しい思いでそう思わずにはいられなかった。

P 290

わかりにくい形で心の危険信号を発する子ども

たちの心に寄り添える存在が、今後ますます必要とされる。このトリイの実践記録は、臨床家だけでなく、教師になる人にとって、とくに、心に問題を抱える子どもたちを相手にする教師にとって、きわめて有益なテキストとなるであろう。

フィクションであるがゆえの迫力を秘めながらも、決して感情に流されず淡々と書かれた本著から、深い感動とともに、人間教育のエッセンスを読みとっていたきたい。

(お茶の水女子大学)

こころのための処方箋

吉増 克實

精神科医として診療に携わっていると、患者さんから何かこころのために良い本はありませんかと聞かれることがあります。わたし自身いつの日

かそのようなこころのための処方箋といった本が書けたらいいなと思いつきながら、折に触れておススメできる本を探しています。よくご紹介する本の